

## 2024年度入学式 式辞

本日ここ日本武道館に集い、入学式を迎えられた皆さん、ご入学おめでとうございます。皆さんのご入学を心から歓迎いたします。

また、これまで、皆さんの勉学を支えてこられたご家族の皆様に対して、敬意を表するとともに心よりお祝い申し上げます。

今、皆さんの胸の中は、これから始まる大学生活、あるいは、専攻科や大学院の生活への期待で溢れているのではないかと思います。もしかしたら、幾ばくかの不安がよぎっているかもしれませんが、これから始まる新しい学びの中で、その不安はすぐに喜びに変わるものと思います。東京理科大学では、幅広い教養と深い専門知識を得るとともに、知的生産の論理的構成や具体的なプロセスを学ぶことで、真理の探究や価値の創造という科学技術の本質を究めることの喜びを感じてもらいたいと思います。

大学での学びは、最初は知識の獲得が中心ですが、学年が上がるにつれて、獲得した知識を使って、誰も見たことがない成果を導き出すことが求められます。高校までの学びでは、等しく学んだ知識を使って、正解が必ずある問題を解いて、予定されている一つまたは少数の答えを出すことが求められていました。科学技術の本質を考えると、予定されている答えを出すことに価値はなく、新たな答えを出すことに大きな価値があります。

この価値を具現化すること、すなわち、誰も見たことがない成果を得るには、与えられた問題を解くだけでなく、皆さん自身の学びの中で、新しいことにチャレンジすることが求められます。今まで使ったことのない知識や道具を使ったり、今まで解いたことがない問題を解いたり、誰も考えなかった答えを導き出したりすることが必要となります。与えられたディシプリンを深めるだけでは新しい分野は開拓できないし、知識をいくら集めても真の独創性は得られません。

当然、このチャレンジには不安が付きまといきます。何度かの失敗を重ねながらも、自分の手で誰も見たことがない新たな成果を生み出した瞬間に、その不安は、すべて拭い去ることができます。その瞬間、不安はとても大きな感動や喜びに変わります。我々科学者や技術者は、その瞬間の達成感、爽快感を味わいたくて、様々な形で新しいことにチャレンジし続けています。

他の人が何と言おうと、一つの科学技術に胸がときめき、心が躍ることがあります。逆に、ある科学技術に限界を感じることもあります。人それぞれに、時として論理的でない予測が

力を持ち、時として社会の評価とは違う感覚を持つことがあります。そんな時でも、それらを論理的な議論に持ち込み、正当なチャレンジにつなげるのが科学技術の基本です。私自身は、正しいと信じた自分の論理に情熱が持てますし、自分が生み出した他人にはできなかった科学技術の成果を宝物だと思っています。「無理だ」、「できない」と言われると、異常なほど探究心が沸き上がります。うまくいかないことの中に、次に探究すべき価値が潜んでいるからです。「何か変だ」、「誰も考えていない」と思った瞬間に、新しい研究課題が生まれます。真っ白な空間に自分の思い通りの未来を描けるからです。

理工系の総合大学である東京理科大学は、そのような考え方を共通感覚として持ち、思考の自由を担保した創造の基盤を有しています。皆さんには、自由な思考と豊かな発想に基づく独創的な成果を生み出す環境が用意されています。

日本の私立大学出身者で唯一のノーベル賞受賞者である大村智先生は、東京理科大学の大学院に在学中、当時日本に一台しかなかった60MHzの高性能核磁気共鳴装置に出会い、他の人が手を付けていなかった、微生物がつくる化学物質から有用な化合物を探索する方法を確立し、ノーベル賞につながる研究を遂行されました。新しい装置、新しい手法は、成功する保証がないので、常に不安が付きまといまいます。大村先生は、自分の論理を信じ、並々ならぬ情熱を注ぎこんで、数々の新しい成果を生み出しました。

情熱を持ち続けるためには、自分の成果でも他人の成果でも、「すごい」と思う気持ちを持ち続けることが必要です。「すごい」と思う気持ちの中には、いつのまにか思い込んでいる暗黙の評価軸が潜んでいます。本来的には、「すごい」ことの評価は、様々であるべきです。皆さんには、ぜひとも、大学の学びの中で、研究への情熱を自分自身の評価軸で測るスキルを身に付けてもらいたいと思っています。マラソンを目指す人が、100m走の記録で評価されても意味がないように、独創性評価に、偏差値は意味がありません。意味があるのは、自分がやりたいことに適した「すごい」ことの評価軸です。その評価を自ら上げるには、そのための努力が必要です。本に出会う、先生に出会う、装置に出会う、技術に出会う、そういった機会は東京理科大学の中にいくらかでも用意されています。自分自身の評価軸で自分に合う出会いを探し、ときめきを感じてください。大村先生が東京理科大学の学びの中で出会ったときめきを皆さんにも感じてほしいと思います。

特に、先生や友達との出会いがとても重要です。現在、科学技術が大規模化していて、良い成果を出すために研究者が一人でできることが少なくなっています。チームで大規模な研究を進めるためには、友達との出会いやコミュニケーションを大切にしてください。日本だけでなく、海外に飛び出して、グローバルなチームの一員として活躍することも、自分自

身の視野が広がり、大きな成果を引き寄せます。チームでときめきを共有することが、大きな感動につながります。

近年、科学技術をベースとした社会変革が進んでいます。新たに開発される科学技術が我々の社会生活を大きく変えるとともに、将来に向けて、さらに大きな変革を生み出そうとしています。その意味で科学技術主義とでもいうべき時代になってきたと思います。そのような変わりゆく社会や産業を支える基盤として、科学技術の素養を持った人材の必要性が叫ばれていて、皆さんはその主役となっています。

もちろん、科学技術を支える研究者や技術者の不足は大きな課題ですが、それだけにとどまらず、科学技術に対する理解が乏しい人材による判断が大きなミスにつながるばかりか、次の来るべき社会の芽を摘んでしまうこととなります。このことに対して、少しずつではありますが社会の目が変わってきているように感じられます。

例えば、「素人にもわかるような説明」を求めたり、他人の指標で技術を評価しようとする姿勢は、評価する側の能力不足を露呈しているわけで、多様化し短命化する現代の科学技術において、不毛な議論と言わざるを得ません。自己評価も含め、評価する側が科学技術の素養を身に付ければよいだけの話です。今まで、科学技術を単なる道具として見ていて、このことに気が付かなかった社会が、ここにきて少しずつ変化していることが見えてきました。今や、銀行、証券、保険会社等がこぞって、科学技術の素養を持った人材を求めています。もはやすべての分野で科学技術をベースに社会は動き始めています。

その大きな動きの中で、理系人材の先頭を走る皆さんは、自分の夢を形にする可能性に満ち溢れています。現代社会は、そのような皆さんに大きな期待を寄せていますし、そのための環境が着実に構築されてきています。その中で、自らの研究の価値を上げるためには、失敗を重ねながらも、自ら信じた道を自らの意思と自らの評価軸で進んで行ってもらいたいと思っています。

その際、どの道を選んだかが重要なのではなく、自ら選んだ道で、「すごい」と思う瞬間に出会えるかが重要です。時間制限のある人生の中で、無限の選択肢の中から、最適解を選ぶことはできません。ところが、自ら選んだ道で自らチャレンジし、独自の経験を積み重ねる時間は、他では得られないという意味で、人生の最適解への近道であると思います。自分の道は自分でシナリオを書き、自らが監督で主役でなくてはなりません。そこには、自分で決めたことだからこそその満足感があります。

今日、皆さんは、大学の学部に所属するか、専攻科や大学院の研究科に所属して、新しい学生生活が始まります。友人や先生とのコミュニケーションを大切にして、皆さんが主役となって行動することにより、自分の世界を切り拓くことを強く望んでいます。東京理科大学は、皆さんが自分の道を切り拓き、社会に新しい成果を普及させるための環境を提供し、皆さんの学びを応援します。東京理科大学での学びが、皆さん自身の夢を皆さん自身の手で形にするための原動力となることを心から願って私の式辞と致します。

2024年4月9日  
東京理科大学  
学長 石川正俊